

拾ったのが 本当に猫かは疑わしい4

ねこ沢ふたよ Nekosawa Hutayo



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

- 第一章 拾ったのはせわしない日々かもしけない
- 第二章 拾ったのは頼れる隠密かもしけない
- 第三章 拾ったのは不思議な出来事かもしけない
- 第四章 拾ったのは信じたい家族かもしけない
- 第五章 拾ったのは当たり前の日々かもしけない

第一章 拾ったのはせわしない日々かもしれない

私、本田薰は、ある寒い雨の日に、とんでもないものを拾つた。姿形は猫だけど、人間や様々な動物の言葉を理解して、時代劇とビールを愛する不思議な猫モドキのモドキ。

モフモフで長毛種の猫のように可愛いものの、中身は全然可愛くない。けれども、とても頼りになる。

夫で獣医師の優一さんと、もうすぐ二歳になる娘の理歩と、トイプードルのマロンと私、そして猫モドキ。

生意気だけれども頼りになる猫モドキに見守られて、私たち家族は、とても幸せに暮らしているのだ。
まあ、モドキが本当に猫かどうかは疑わしいのだが……

◇ ◇ ◇

玄関を出るのがこんなに難しいとは。

すくすくと成長してくれている娘、理歩。しかし、十一月の朝に、母である私、本田薫はとても困っている。

十二月。これは、誰がなんと言おうが、日本では『冬』なのだ。

寒くてみんなコートを着て肩をすくめて歩いている。

なのに理歩は、本日の保育園へ行くコーデに、サンダルを選びたいと言つて聞かないのだ。

「理歩、ねえ。サンダルは……ね？ 寒いから。ほら、この猫さんの付いたピンクの靴にしようか？」

私は、この理不尽の塊（娘）がくを、説得しようと試みる。

「いや！」

ブンブンと理歩は首を横に振つて、私の要求を受け入れてはくれない。

『魔の二歳児』

世間では、言語を理解できるようになり、自分が芽生え始めたこの時期の子をそう呼ぶらしい。言葉を理解すれば、使ってみたくなるもの。自分が芽生えれば、意見も言ってみたくなるもの。結果として、このように、「いや」「ダメ」「ない」の嵐となるのだ。

もし、私が大富豪で外に働きに行かななくてよくて、子どもを保育園に通わせる必要もない身分だったとしたら、この幼子特有の我儘も、「お可愛らしいこと……よくつてよ、本日は、玄関で過ごしましようかしら。ほほほ」と笑つてみせるのだが、貧しき平民の私はそんなわけにはいかない。

私は働くしかないし、そのためには、ぜひとも理歩には保育園で過ごしていただきたい。

「ほら、こっちのお靴を……ね？」

私は、理歩の足を強引に靴にはめ込もうとする。

履きさえすれば、きっと諦めると思った。だが、私の考えは甘かつた。

「ダメーー！」

理歩は、靴を小さな手ではたき落とす。
うう……つらい。もう遅刻寸前なんだけれども、どうしよう……
いつそ挂いて保育園まで無理矢理連れていこうか。

……でもなあ

大きくなってきた理歩がいやいやしているときに抱っこしたら、落としそうになる。たとえて言うならば、獲れたてピチピチのマグロ。

金力で暴れるマグコは、ベビリカリに乗せられな

凄腕漁師ではないだのアラサーOLの私には、無理なのだ。
そこで髪をよくクロスバービーで弄せられないしわこも貴い

ふむ
さうぞう
その者の困つておるようじやの」

この猫モドキめ。

困っていると分かっているのなら、早く助けてくれたらいいのに。

「河を勧業、ておる。農^{わし}が助けるのは、薫ではな、。理志^{じや}！」

卷之三

なんだと？ 指軍が来たと思つたら、敵がまだか！

れど？

たい。

援軍である愛しのモドキが来て、理歩が満面に笑みを浮かべる。
「ふむ。理歩は、本日はこの覆物を覆きたゞのじやなー！」

あい！

意志の通じ合う理髪とモトギ

モドキが、モフモフの尻尾を揺らしながら少し考える。

「理歩よ。よき履物じや」

どうするんだろう……

「あい！」

自分のサンダルを褒めてもらつて、理歩は嬉しそうだ。

いや、でもさ、困るのよ。

冬よ？ サンダルで行つたら、風邪引かない？

「では、サンダルを履きつつ、温かくする方法を考えねばの。寒いのは、理歩も嫌じやろう？」

「あい！」

え、そつちなの？

いや……そうなの？

「でもさ、モドキ……サンダルじゃ、保育園では困るのよ」

「分かつておる。外遊びにサンダルは不向きじや。だから、普段の靴は、薫が持つていくのじや」

園に着いたらコッソリすり替えるか、先生にお渡しすればいいってことか……確かにそれならば、なんとかなるかもしねれない。

「そうと決まれば、マロン！」

「ワン！」

モドキに言われてマロンが持つてきたのは、私の靴下だった。

え、まさか……

現在の理歩の足元コードをお伝えしよう。

白い靴下を履いてからのピンクのサンダル。その上に、私の室内履き用の毛糸の靴下……

いや、理歩の足はまだまだ小さいからさ、靴履いたままでも、靴下を余裕で覆けるけれどもさ。

「何、理歩が風邪を引かないのであれば、薫の靴下くらい安いものであろう？ 実際、安物だろうし。しかも、これで出立でき、遅刻せずに済むのじや」

「そうだけれども……」

「うう……私の靴下。

「ベビーカーに乗せていくのであるから、それで歩き回るわけでもなかろう？」

「そうだけれども……さ……」

「おかあしゃん！ 行こ！」

そんな満面の笑みで言われたら、どうしようもないじゃない？

「ワン！」
マロンさん、さつさと行きなさいと仰いましたね。

仕方ない。うん。
靴下の尊い犠牲によつて、我が家の平和は保たれたのだ。



無事出社できた私は、ギリギリ遅刻を免れた。

会社の自分のデスクでパソコンを起動する間に、スマホのメールを確認する夫である優一さんからメールが来ている。

『大変だったようですね。モドキちゃんに聞きました』

猫モドキは、先に家を出ていた優一さんに、本日の玄関での禿木を報告したようだ。

『大変だったのよ！二歳児恐るべし』と、私は、返信する。

互いに仕事で忙しい私たち夫婦は、メールでの会話が多い。メールがない時代だつ

たら、ずいぶん寂しい想いをしていたことだろう。

文明の利器よ、ありがとうございます。

「たるんでいますよ！薰さんがサボると、こつちにしわ寄せが来るんですからね！」

おう、言うてくれるやないか！と、言いたくなるセリフを浴びせてきたのは、後輩の幸恵だ。

何を言うか。散々今まで仕事をサボつて尻拭いをさせてきたのは、どう考えても幸恵のほうだ。

配偶者であるダーリンをこよなく愛し、仕事にいまいちやる気を見せない幸恵は、度々突発的な有休を使って、共に業務を遂行する我々同僚を翻弄してきた。

幸恵が繁忙期に突然温泉旅行のための有休取ったの、忘れてないからな！あのときは、地獄だつたんだから！口には出さないけれど。

でも、今、ここで幸恵と争っている時間はないのだ。
仕事をして、さつさと帰りたい。

理歩の保育園のお迎えは、優一さんが行つてくれるから早退はしなくともいいけれど、それでも愛する家族のもとに、私は一刻も早く帰りたいのだ。

13 捨ったのが本当に猫かは疑わしい4

いやいや期真っ盛りの理歩の相手をするのは、大変だ。

優一さん一人に頼りっぱなしの状況にはしたくない。

「ねえ、知っています？」薰さん

だからさ……私は一刻も早く帰りたいのに、なぜ話しかけてくるのだ、幸恵よ。

今しがた、たるんでいると私を非難したのは、幸恵ではないか。

「何、またイケメンでも見つけたの？」

「違います。イケメンなんて、その辺に落ちていません」
我が社一のイケメン・ソムリエである幸恵のイケメンレーダーは完璧で、イケメンを見つける度に私に報告に来るのだが、今回は違うようだ。

じゃあ、なんだろう。

趣味も性格も合わない幸恵が、私に話したいことなんて、他にあるのだろうか。

「実は……柿崎係長に、彼氏ができたみたいなんです」

「はあ？」
柿崎に彼氏？

いかん。あまりに予想外の内容すぎて、声が裏返った。

私の友人でもある係長の柿崎は、仕事を大切にして、恋愛にはあまり興味ないタイ

プだ。

もちろん魅力的な人間だから、恋人ができるたとて不思議はないのだけれども、友人である私が知らないのに、それほど仲がいいわけでない幸恵がなぜ柿崎に恋人ができると知っているのか、さっぱり分からぬ。

「薰さん、柿崎さんと仲がいいのに、知らないんですか？」

「いや、知らん。知らんよ、そんなこと。てか、どうしてそれを幸恵が知っているの？」

今まで、柿崎と幸恵が仲が良かつたことがあつただろうか、いや、ない。

柿崎が、彼氏ができたと幸恵に報告している場面がまるつきり思い浮かばない。
「そんなの、見ていたら分かりますよ」

「見ていたら……？」

見ていて、彼氏がいるかどうかが分かるものなのだろうか？

普通分からぬだろう？ だつて、もし、恋人がいるかどうかが外見で判断できるならば、結婚詐欺なんてできないはずだ。

「そんなの、幸恵の勝手な決めつけでしょ？ 見て分からぬじゃない」

「分かりますよ。だってほら！」

幸恵が指さす方向にいるのは、当然、柿崎。

機嫌がいいみたいで、明らかにウキウキして、ニコニコの笑顔で仕事をこなしている。

「ほら、幸せオーラがはみ出ていますし」

「確かに、幸せそうだけれども……」

占い師でもない私は、柿崎がご機嫌な理由が、恋人ができたからだとは判断できない。

ほら、卵を割つたら黄身が二つ入つていたとか、近所のお散歩ワンコが可愛かつたとか、そんな理由でも、人つて案外幸せになれるじゃないか。そういうのかもしれないし。

「あれは、絶対に恋人ですね。あ、ほら、あの指輪！ ちょっと、デザインはダサめですが、あれを見て恍惚としていますし」

なるほど……本當だ。

アクセサリーはあまり付けない柿崎が、左手薬指に指輪をしている。

ダサいからどうかは分からないが、柿崎が二匹の蛇が象られた指輪をチラチラ見ては嬉しそうなのは、確かにそうだ。

え、つまりそういうこと？ でも柿崎に恋人はいなかつたはず。

とりあえず、一旦落ち着け私。見間違いの可能性だつて……

うん、やっぱり左手薬指。

それは、古より心臓に一番近い指とされ、婚約指輪や結婚指輪を嵌める指なのだ。

……ならば、やっぱり、幸恵が言う通り、婚約、もしくは結婚したということなのだろうか。別に言う義務なんてないけれど、私は恋人ができたことすら聞かされてないぞ。

「年下バンドマンですね。あの指輪のデザインからして！」

混乱する私をよそに、幸恵が興奮しながら断言した。



僕、優一は、大学の研究室でスマホを確認して、朝の玄関で起きた事件を知る。

僕は、祖母が院長を務める動物病院で働きながら、大学院での研究も続けていた。これも愛する妻である薫さんが広い心で許してくれて、いるからだと思えば、嬉しくて口元が緩む。

『儂の活躍により、見事に解決したのじゃ…』

モドキちゃんの自信満々なメールが、なんだか可愛い。

研究室は、今、トラブルの真つただ中だ。

モドキちゃんに頼んだり……助けてくれるのかな……

僕は、頭を抱える。

「チクシヨー！」

ゼニで飼つてじるオウムの小梅が絶叫する。

「だーかーうー…ここは、絶対に、この結論で正しきんだつてば… 症例もそつとつているでしょ？」

研究チームのリーダーである西島が戦つてじるは、我がゼニに春から仲間入りした東山だ。

「あー、まだ分からないのかしら… それじゃあまた、根拠が曖昧でしょ？ 確か、同じような研究をしたアメリカの論文では、この倍は症例を挙げておりますわ」

東山が、真っ向から西島の意見に反対する。

もへ、春からずっとこんな感じで、全然研究が進まない。

今から倍の症例？ そんなの無理すぎる。

東山の言つことは、間違つてゐるわけではない。

確かにそれが理想といつものだ。だが、それを実践するために必要な費用も時間も人員も僕たちにはない。

「ラクシユ……どうしたらいい？」

春に亡くなつた実家の猫、ラクシユの写真に向かつて、僕はつぶやく。

僕の机の上には、薫さんと理歩、モドキちゃんとマロンの写真と一緒に、ラクシユの写真も飾つている。

ずっと僕の相棒だつた大切なラクシユ。青く澄んだ瞳で真っ白な毛並みのラクシユの写真を見つめれば、悲しさと一緒に、じんわりと温かい想いも蘇つてくる。

『ラクシユ……

「えー… ペットロス・ド・オトウサーンー… 泣かない… 気持ちは分かるけれどもさー…」

「え?」

いかん。大粒の涙が止まらなくなっていたら、西島に見つかってしまった。

「うー… ラクシユとの日々を思い出しても、涙が落ちてしまった。

「ともかく! 我々獣医学生は、泣かないの!」

「うー… めんなさい…」

日々動物の命と向き合つのが獣医師の仕事だから、愛猫の死をいつまでも泣いていては始まらない。

理屈では分かっていても、涙が止まない。

いつまで経つても慣れないし、なんなら自分が携わった患者の死に直面したときにか、

僕は泣いてしまう。

「ともかく、このペスカトーレを止めよ… ペスカトーレ…とは?」

あ… 東山のことか?

どうも西島は、帰国子女の東山を横文字で呼びたがる。

だが、あまりに言葉のチョイスがいい加減すぎる気がする。

べー「ンエビとかペスカトーレとか… ピーフストロガノフなんてのもあったな。

えつと… お腹が減つているのか? 西島。

「ねーは言じましても、無理ですよ。東山の言ひ方とは、正論ではありますし…」

「あー、本田はよく分かっていないじゃないですか?」

すわ

異世界から転生してきた、悪役令嬢のような縦巻きロールの髪型^がが特徴の東山が、ホホ

ホホと、愛扇^{あいせん}をはためかせながら優雅に笑う。

「でも、西島の言つことだって、分かります。だって、僕らには、予算も時間も人手もありません」

東山にはそれは言つたものの、もちろん西島の意見も何も間違つていない。そういう意味も込めて、西島の肩を持つ意見もしっかりと伝えておく。

「でしょ? 不可能ならば、可能な範囲で頑張るしかないのよ。無理をすれば、どこかにしわ寄せがいくし。下手したら、研究自体がダメになる」

西島が、「チクシユ」と鳴き翼をバサバサとほためかせる愛鳥の小梅を肩に乗せて、

ウンウンと頷く。

「小松はどう思う？」

研究室の壁になつたかのように、気配を消していた小松に、僕は話を振つてみる。

「お前……裏切ったな！」

「だつて、小松だけスルいです」

四人でやつてゐる研究だ。この先の見えない争いから小松だけ逃げるなんて、できないはずだ。

とじうか、お願ひだから協力して。僕だけでこの一人を説得するのは無理だ。

「小松の意見は？」

「そうよ。速やかに答えてー！」

東山と西島に詰め寄られて、小松が責せめる。

「いや……その……本田と一緒に……その……ちょっとと、一人で考えさせて」

「わ、小松？」

「死なば諸共ちのくもだ」

小松……いや、最後に話を振つた僕も悪かつたけれども、まさか、こんな形で戻つてくれるとほ。

「じゃあ、明日までに結論ね！」

「そりですわ！ 二人とも、ハッキリなさつてー！」

「チクシヨーー！」

僕たちは、西島と東山と小梅の言葉に「はい」と答えるしかなかつた。

◇ ◇ ◇

育児といふものは、仕事が終わつて帰つたところからまた戦いが始まる。

柿崎に恋人ができたかもしれない疑惑のあつた日の夜、私は、会社での出来事をモドキに相談した。

「ふむ。いろいろとあつたようじやの」

モドキは、ささみスティックを齧かじりながら、私の話を聞いてくれている。

猫に話したところで解決なんてしないだろうが、こういう小さなモヤモヤを聞いてくれるだけでもありがたい。

今は、手元に理歩の着替えを用意して、優一さんがお風呂から合図してくれるのを待つていい状態だ。

風呂からは、理歩の機嫌がよさそうな声が聞こえてくる。

優一さんが、「いちご、にゃんこ、さんま、しろねこ」、いつでも二コニコ五つ……」なんて、創作数え歌を歌つて理歩と遊んでいる。

いや、理歩の好きなものを並べて歌つてているのだろうけれど、多いな……ネコ。十まで数え終わるまでに、何度猫が登場するのだろうか。

「はちわれ猫さん、クッキー食べて、モドキとマロン……ワンコもくるりん、はい、おしまい！」

良かった。最後は、ワンコも登場するんだ。

いや、そこを良かったと捉えるかどうかはとても微妙だけれども。これ……数は数えられているのだろうか？

人々、数え歌つて変なものが多いし、かなり独特だ。

まあ、理歩も優一さんも楽しそうだから、いいけれど。

「薰さん！ 理歩、お風呂から出ましたよ！」

良かつた。最後は、ワンコも登場するんだ。

優一さんの声がして、理歩がとことこ濡れた体のまま、ちらへ走つてくる。
理歩用のタオルにくるまれてはいるが、まだ全然体は拭いていない。

当然だ。

理歩の体を拭くのは、私の役割だ。

本当は脱衣所で待つている理歩を私がつかまえて、入浴で濡れた理歩の体を拭いてあげるはずだったのだけれど、理歩は待てずに脱衣所を一人で出てきてしまった。

「モド！」

理歩は一刻も早く、モドキに会いたかったのだろう。
モドキを見つけて、大喜びだ。

「いかん。ささみが見つかってしまう！」

モドキは慌ててささみスティックを袋に入れて、後ろに隠す。

タオルを羽織つただけで、まだ湯が滴つている理歩がモドキに抱きつけば、猫毛は理歩につくし、モドキは濡れてしまう。

危険だ！

「ささみよりも、ほら、逃げて、モドキ！」

「うお！ それよりも早くつかまえんか！ 薫！」

「ワン！」

マロンも私を応援してくれている。

ここは、ラガーマンのようにタックルして、理歩を止めなければ！
「モド！」

風呂上がりでピンク色のほっぺをした理歩は、お風呂が楽しかったのかテンションアゲアゲだ。

さあ、迎え撃つ私は、体力に自信のないアラサーのインドア派。

エンジン全開の元気な幼児、理歩に勝てるのか？

だが、見切っているのだよ。

生まれてからずっと、理歩のよちよち歩く姿を見ている私だ。

理歩の行動パターンは……あ……れ？

くっ！ 抜かれてしまった。

つかまえ損ねた！

「うおお！ 理歩、理歩、ちょっと待て！ 先に体を拭くのじゃあ！」

モドキは、慌てて猫タワーを駆け上る。

良かつた。モドキの運動神経が発達していく。

……まあ、人間よりも俊敏だよね、猫だもん。

時々猫なのか疑いたくなるけど、モドキは猫のはずなのだ。

その後ようやく理歩をつかまえて、体を拭いて着替えさせる。

「どちらも放つておけばよいのじゃ。簡単じゃ」

猫タワーの上で香箱座りしたモドキが、我々下々の人間を見下ろしながら宣う。

私の膝には、ベビー用のマグで風呂上がりの麦茶を飲む理歩が座つている。

マロンは、騒ぎが落ちていたので、部屋の隅のクッションでスヤスヤ眠つている。

「そういうものかな？」

私が相談したのは、最近の理歩のイヤイヤ行動と、会社での柿崎のバンドマン年下彼氏問題。

モドキは、その両方を放つておけと言つている。

「理歩は、自我が芽生え始める自分の気持ちのバランスが上手く取れないのであろ

う？ 成長している証拠だ。ほれ、思春期に突然、母をクソババア呼ばわりし始める年代と一緒にだ。放つておけば、成長に伴い自然と収まるじゃろ」

「そうか……そうよね。

中学生になつた理歩が、「うるせえ、ババア！」と言つてくる姿は、全く想像がつかない。しかし、思春期に大人と子どもの狭間で、なぜか不安になりイライラしてしまふ気持ちも、反抗したくなる気持ちも、分からなくもない。

青春小説なんかは、そんな不安定な年頃のガラス細工のような心の動きを描いたものが多く、とても感動する。

この間読んだ本なんて、ラストで号泣してしまつたものだ。

今、理歩は赤ちゃんと子どもの狭間なんだなあ……と、思えば、ちょっと感慨深い。「そして、その会社の親友の話。別段、気にする必要はないであろう？」

「だって、ちょっとは気になるじゃない」

「助けが必要ならば、向こうから話ををしてくるじゃろう。そのときまで、放つておけばよいのじや。話をされたときに、静かに聞いてやる……それが、友というものじや」

猫タワーから、モドキの神託かみたくが下りてくる。

猫のお告げが正しいかどうかは分からないし、モドキは、別に神でも猫又でもないので、ありがたみもご利益りりやくもないのだが、なんとなく腑ふに落ちる。

「そうよね。言う必要があるなら、言つてくるでしょ」

別に、友人だからって全てを曝け出す必要はない。

いつそ……結婚とかが決まつてからでも、遅くないくらいに。

一抹の寂しさは感じるが、恋愛のことを話すのも話さないのも、柿崎が決めることなのだ。

なんだ。簡単なことだ。

「理歩、麦茶飲み終わつたみたいですね」

お風呂から上がつてきた優一さんが、理歩の手からマグを取ろうとする。

「いや！」

理歩は、マグを離さない。え、なんで？

だつて、もう飲み終わつて空っぽなのに？

「もうちよつと持つておきたいようじやの。放つておけ、直じきに飽きる」

モドキが解説してくれる。

まあ……そつか。お気に入りのマグだものね。

いつか、そのくらい。

「あ……そつだ」

「なんですか？」

コテンと首をかしげる優一さん。

可愛いな、私の夫。理恵そつくりの仕草だ。

そういう仕草、私的には、最高にツボなんだけれど。つい、ふへへと、変顔になってしまいそうになるが、なんとかこらえる。て、そうじやないのよ、気になつたのよ。

「優一さんつて、やっぱり中学か高校のときには、クソババアとか言つていたの？」

そう。

全く言わないとと思うの。

だつて、優一さんはこんなに穏やかな性格だし。でも、意外と昔は反抗期で暴れていたとか？

「ああ～反抗期ですか？」

「優一さんつて、やつぱり中学か高校のときには、クソババアとか言つていたの？」

「ああ～反抗期ですか？」

優一さんは考え込む。

しっかりと正確に想い出してくれているのだろう。

真面目だ。

「いえ、なかつたですね。部屋に閉じこもつていきました。会話が減つたことはあります。が、クソババアとかは、言わなかつたです」

「そうなんだ」

「だつて、ラクシユがいましたから」

「ラクシユ？」

「ええ。ラクシユです。悩みは全部、ラクシユが聞いてくれていましたし……」

「いかん、優一さんの目がウルウルし始めた。

未だ心の傷が癒えない優一さん。

ラクシユのことを思い出すと、つい涙があふれてくる。

そうよね……あんなに治療を頑張つていたし、ずっと、一緒にいた相棒だもの

ね……

いかん、私も泣けてきた。

夫婦一人して、泣きそうになつてこらえていると、鼻先をかすめて飛んでいくものがあつた。

理歩のマグだ。

マグは、フローリングの床に当たつて、カラカラと転がつてゐる。

「理歩？ それはダメだと思うよ？」

心が不安定な時期なのは理解した。

だが、破壊行動はよくない。

お母さん、それは、ちょっと駄目だと思う。

「いやー！」

何が嫌なのか分からぬが、理歩は、何かを否定する。

まだ、厳密には二歳になつていない一歳十一ヶ月の理歩だ。

このイヤイヤ行動が、一年近く続くのかと思うと、ちょっと私のほうが情緒不安定になりそうだ。

世のお父さんお母さんは、こんな子どもの行動を受け止めているのかと思うと、すごくすぎる。



次の日、出社すると何やら揉めている。

「だから！ あんたに関係ないでしょ？」

「ええ～。気になりますってば！」

柿崎と幸恵が、わあわあ言い合つてゐる。

さては幸恵のやつ……私が柿崎に彼氏の話をしないのに痺れを切らして、自分で聞きに行つたな？

そして、柿崎に『関係ない』と一蹴されたと。

始業時間になつていなければ、やっぱりプライベートなことを会社で聞くのは、よくない気がする。

本人が自分から言つのであれば、世間話となるけれどもさ。

他人が詮索するのはやはり違う。

そういう詮索つて結局、『髪切つたつてことは、失恋？』とか『不機嫌だね、彼氏

と喧嘩した?』とか聞いてくる、昭和の悪しき習慣と同じではないか。

『はい、終了。もう、始業時間だし! 幸恵は、ちょっと遠慮しなよ』

私は柿崎を助けようと、間に割つて入る。

柿崎は、係長の立場上、幸恵にはきつく言えない。

幸恵がすぐパワハラだつて言い出すし。

ここは、平社員の私、本田薰が、末端の末端である立場を利用して、正しく幸恵に注意するべきであろう。

「でもお。気になります……」

幸恵よ、まだ言うか。

てか、何を指さして……うおい。

柿崎の指を彩る指輪、なんだか増えている。

二匹の蛇が絡み合うデザインだったのに、もう一つリングが追加されて、蛇の頭数が四匹になつた上に、さらに赤い石まで付いている。

「いや……それでパソコンは……きつくなない?」

いいんだよ、柿崎に彼氏がいたつて、誰から指輪をもらつたつて。

だつて、柿崎のプライベートだもの。

友人なんだから、相談されれば聞けばいいこと。こちらから詮索すべきではない。

それは、猫モドキに言われるまでもない真理だ。

だが、あまりにコテコテの指輪の装飾。

キーボードを打つときに、大変ではないだろうか?

「大丈夫よ。根性あるから!」

「おお……柿崎に根性あるのは知つてゐるけど……」

うん、知つてゐる。

ええ、知つてゐる。

我が部署の頼れる西根課長が、介護のために時短勤務している昨今、我が部署を一番支えてくれているのは、係長の柿崎だ。

前例のない大変な仕事に、誰しもがどんなときも働きやすい職場を目指して頑張ってくれているのは、根性がないとできないことだ。

「ほら、仕事!」

おおつと、そだつた。

柿崎に言われて、私は自分の席に着き仕事を始める。本日もたくさんやらねばならぬことがあるのだ。

カタカタカタカタ……

あちらこちらかのデスクから連続した音が鳴り響く。

柿崎も軽快にキーボードを叩いているようだ。

さすがだ。なんの差しさわりもないみたいだ。

「くつ！ 指が！」

痛かつたのだろうか。

柿崎が、左薬指を押さえている。

いや、差しさわりあるんじやない。

ダメだろ、それ……

柿崎は気になるけれども、私も自分の仕事がある。

そう思つて、それからしばらく一生懸命に伝票と向き合つていると、目が痛くなつてきた。

柿崎が、左薬指を押さえていた。

「何度も言うけれどさ。私、仕事したいの」

「もう！ 薫さんたら！ 柿崎さんが詐欺師だまに騙されていてもいいんですか？」

え、詐欺師？

なんの話だ。

「バンドマン年下彼氏の話ではないの？」

「そう言つていただろ？ 幸恵よ。

「そうです！ そのバンドマン年下彼氏が、結婚詐欺師でロマンス詐欺師なんですよ！」

「なんでそんな極端な設定になるのよ」

柿崎は、ちょっと個性的な指輪をしているだけでしょ。

本人が、彼氏からもらつたとも、結婚の約束とも言つていないんだつたら、何をそ

んなに極端な妄想を膨らませてているのだろう。

「柿崎さんの表情をよく見てください！ 時々スマホを見て真剣な顔したり、嬉しそうな顔したり」

「あんたね……柿崎のこと観察している暇があつたら、仕事すれば？」

そう。幸恵が仕事をバリバリやってくれれば、私の分担も減るの。

そうしたら、愛する我が子と愛する夫、愛するワンコと愛する猫モドキにも、早く会えるの。

そうよ、こうしてはいられないわ。

さつさと仕事して、定時には帰りたいのよ。

「待つてください！」

袖を幸恵に引っ張られて、私は身動きが取れない。

「だつて、スマホに連絡があつて一喜一憂くらいするでしょ？ 私だつてそうよ」

私だつて、優一さんからの連絡には、きっと微笑みを浮かべて見ているはずだし。

「蕙さんがスマホ見て変顔しているのは知っていますけれども、柿崎さんは違うんです！」

幸恵？ そんなに私、変な顔している？

そりや、スマホの待ち受けは、麗しの推し俳優、ティミー様だし……ご尊顔を拝するたびに、その後光が差す笑顔に蕩けはしているかもだけど。

変顔にはなつてないと思うのよ……自信ないけれども。

「柿崎さん……年齢的にもきっと結婚に焦つていらっしゃるんです。そんなときに、年下バンドマンの彼氏に、結婚を餌にいろいろと言われたら……そりや必死になっちゃいますよね……『俺がビッグになるためだ』なんて言われれば、お金もたくさんむしり取られちゃうかもです。きっと、あんな安物の指輪一つで、柿崎さんはいろいろと酷い目にあつてているんです」

悪い男に騙される柿崎を心配して、涙ぐむ幸恵。

だが待て、それ、柿崎に失礼じゃない？

私たちよりも年上の柿崎とはいえ、別に今時、三十代の独身女性なんて珍しくもないし。

特に焦る必要なんて、柿崎には全くないじゃない。

そりや、好きな人と結婚できたら幸せだけれども、嫌なやつと結婚するくらいなら、

自身のほうがよっぽど幸せだと思う。

幸せの形も、家族の形も、それぞれだ。

他人が口を出す問題ではない。

そもそも、バンドマン年下彼氏なるものが、柿崎に存在するかも分からんんだ。

「幸恵、それは……」

「ともかく！ 本日のお昼！ 柿崎さんに問いただしてみますから！」

ええ、せつかく今日は、美味しいパン屋さんのパンを買つてきたというのに？

せつかく今日は、美味しいパン屋さんのパンを買つてきたというのに。
美味しく食べられなくなつちやう。

「幸さんも協力してくださいね！」

「嫌だよ」

即答した。

だつて、嫌だもの。

なんのメリットがあつて、幸恵に協力せねばならぬのだ。

「幸さんは！ 柿崎さんが心配じやないんですか！」

「いや……だからさ、そんなことを勝手に……」

「協力、頼みましたから！」

入社以来ずっと、相変わらず、まるつきり、私の言うことを全く聞かない幸恵は、

息巻いて席に戻つてしまつた。給湯室に私を残したまま。

言つたよね、私……嫌だよつてはつきりと。

言つたんだよ。聞いてもらえなかつたけれども。

運命の昼休憩。

私は、ドキドキして更衣室に向かう。

「だつて、心配なんです！」

幸恵の声だ。

「知らないわよ！ 勝手にこちやこちや言わないで！」

これは、柿崎の声ね。

既に揉めている現場に入るのかなり嫌だけれども、仕方ない。

私は、意を決して、更衣室の扉を開ける。

……うわ、めちゃくちや陥悪だ。

睨み合う幸恵と柿崎。

「な、何か？」

幸恵は何か言えって言うけれどもさ、声、裏返りまくりの私。

「あ）。柿崎？」

「何？ 薫まで、何か知りたいの？」

柿崎が呆れる。ごめんよ、柿崎。でも、ロマンス詐欺かどうかは気になるのよ。

「だって、柿崎さんたら、あの指輪、大切な人との想い出だって言うんですよ？」

幸恵が息巻く。

「そうよ、それが何よ。これは、愛しい人との大切な時間の記念なの！」

柿崎が悔然として答える。

かなり機嫌は悪そうだ。

え……そうなの？ ジャア、恋人からもらった指輪つてこと？

「指輪を手に入れるために、苦労したつて！」

幸恵が、ロマンス詐欺を立証しようと躍起になつてている。

「当たり前でしょ！ これを手に入れるために、どれだけ貯金を叩いたか！」

貯金？ エ、柿崎、貯金つて言つた？ それは、かなりお金を使つていてるつて

「…？」

「貢いでいるつてこと？」

私は、恐る恐る柿崎に聞いてみる。

「当然よ。だって、それが生きがいだもの！」

柿崎は、愛おしそうに指輪を見つめる。

これは……かなり入れ込んでいるのではないだろうか。

「ほら、やつぱり！」

幸恵がドヤ顔する。

そこ、ドヤ顔するところ？

「あのさ、柿崎？」

私も、ちょっと心配になつてきました。

「何よ？」

「頻繁に会えているの？」

「薰、何言つているのよ。なかなか会えないから、貢ぐんじゃないの！」 日本に来て

当たり前じゃないって、柿崎は言うけれども……これ、マジか。やばくない？

「ひょっとして、海外の人ですか？」

幸恵が刑事のように柿崎を尋問する。

「そうよ？ なかなか日本には来られないの」

「お金持ちですか？」

「だと思うよ？ SNSには、リッチな写真を上げているし」

海外に住むお金持ち、柿崎に大金を貢がせている、なかなか会えない。

それはもうロマンス詐欺で決定ではないだろうか？

「大体ですね、柿崎さんはもう若くないですから、気をつけないと！ いいですか？」 海外のお金持ちが日本に来るのに、柿崎さんに貢がせるわけがないんです！

自分で旅費ぐらい工面して、来たりや来ますよ！」

だいぶ柿崎に失礼な出だしで始まった幸恵の言葉だが、後半のほうは、確かにそ
うだ。

おかしいのだ。

海外のお金持ちが、柿崎にお金を払わせるのは……

それは、ロマンス詐欺のなんたるかをあまり詳しく知らない私でも分かる。

「柿崎さん、騙されています！」

名探偵かよって、ツッコミ入れたくなるドヤ顔で、幸恵が断言する。

「騙されていないつてば！」

柿崎が言い返す。

「騙されている人は、みんな言うんです！『彼は私には誠実なの！』とか！」

「まあ、言うけれども。誠実よ」

幸恵と柿崎の言い合いを聞いて、私は、頭を抱える。

あかんやん。

つい、関西弁で頭抱えちゃうくらいに駄目な気がする。

ピロロロロ……

柿崎のスマホが鳴る。

「あ、待って。大切なメール！」

柿崎が、慌ててスマホを見る。

（くだん）
件の彼からのメールなのだろうが、柿崎の顔が、パアアッと明るくなる。

「やった！ 来るつて！ 日本に！」

「すぐ嬉しそうにスマホを抱きしめる柿崎は、とっても乙女で可愛いが、すぐ心配だ。

「どうしよう。チケット取れるかな？」

柿崎がウキウキしている。

え……チケット？

「アリーナ、きっと抽選だよね？」

柿崎が、左手に嵌めた指輪を右手で愛しそうに擦る。

「……アリーナ……」

私は、幸恵を見る。

おい、幸恵？ これは、違うんじゃない？

「あ……あの、良かつたですねえ……」

今まで散々、ロマンス詐欺だつて騒いでいた幸恵の声のトーンが落ちる。

ええ、そうでしょうね。

これは、完全に、『推し活』だよね？

「ひょっとして、ヘヴィメタバンドのオリジナルグッズ？ その指輪……」

私は、柿崎に確かめてみる。

「そう、前回と前々回に来日したときに手に入れた限定グッズ！ アリーナのプラチナチケット限定の記念グッズだったから、手に入れるのに、貢ぎまくったのよ！」

とても嬉しそうな柿崎を見て、私は理解する。

なるほど……

「また来てくれるよう願掛けしていたんだけれども、効果あつたわ！」

嬉しそうな柿崎。

私の推し様、ティミー様も海外にお住まいだから、推しが来日してくれる喜びはすぐ分かる。

ティミー様は映画俳優だから、日本で上映されるプロモーションのときにしかお越しにならないし、会える確率は少ないけれども、それでも同じ日本に推し様がいると思えば、心弾む。

私もティミー様のアリーナ限定グッズなんてあれば、命がけで手に入れるだろう。

「アリーナ、手に入るといいですねえ……」

幸恵はとてもにこやかに答える。

おい、誰だ、ロマンス詐欺なんて言っていたやつは！

結局、柿崎がロマンス詐欺に引っ掛けたという疑惑は、幸恵の勘違いだった。

あの指輪は、柿崎がライブで買ったグッズだった。

「アリーナ席に座る熱心なファンはね、『花嫁』^{フライト}って呼ばれるのよ」

推しを語る者独特の、あの恍惚とした表情を浮かべて、柿崎は推しバンドの魅力を語る。

指輪は花嫁の象徴で、ファンにとつては特別な意味があるらしい。

指輪に文字が彫つてある。あれがバンドの名前なのかな？

熱狂的なファンになると世界中のツアーに参加し指輪を集めているらしいが、さすがに我々の乏しい給与ではそこまでできるわけもなく、柿崎は、いつになるか分からぬい来日公演のために、お弁当は手作りし、日々節約してコツコツ貯めているのだそうだ。

確かに柿崎はいつも手作り弁当を持ってきていた。

料理上手といえども、毎日激務の中で用意するのはつらくないのかと思つてはいた

けれども、あれも推し活の一環だったのか。

「今回のライブチケットは？」

私は、柿崎に聞いてみる。

「それがまだ正確な日付も決まっていないのよ」

柿崎は、バンドの公式ホームページを確認しながら答える。

「だったら、もうしばらくその指輪は嵌めたまま？」

願掛けならば、チケット入手するまで……あるいは、ライブ開催までは指輪はつけっぱなしだろう。

「うん。もちろんよ！」

柿崎は幸せそしだ。

そりや、推し様が日本に来てくださるなんて、推している人間からすれば、嬉しい限りだろう。

「それならそうと、早く言ってくればいいのに」

ブツブツと文句を言い続けているのは幸恵だ。

「あんたね、言つたら絶対に馬鹿にするでしょ」

ジロリと幸恵を柿崎が睨む。

「当たり前です！ 大の大人が、推し活でそんな変な指輪をして生活するなんて、ありません！ 普通はですね、大人の女性は、大人に相応しい装いをするものなんですよ！」

幸恵が宣うことが、一ミリも私には理解できない。

なんだよ、大人に相応しい装いって。

別に、周りに迷惑をかけないならば、どんな格好をしていてもいいはずだ。
そりや……お葬式に理由もなくド派手な格好をするのは憚られるし、結婚式に白いドレスを着て行くのはダメとかは分かる。

だが、それだって、出先で訃報を聞いて喪服も用意できずに慌てて駆け付けた人……とか、花嫁に復讐の意味を込めて……とか、何か理由があればOKだろう。

あ、いや、復讐は駄目か。結婚式が血に染まってしまう。

ミステリ好きのママ友の遠藤さんに、ちょっと影響されすぎたかも知れない。

「別に、私たちは、お客様に会う仕事でもない経理の仕事よ？ いいじゃない、指輪ぐらい」

私は、幸恵に言い返す。

「薰！ そうよ、そうよね！」

柿崎は、うんうんと首を縦に振って、私の意見に賛同してくれる。

「ええ。そういうところ、薰さんも柿崎さんも、世間からされているんですよねえ」
幸恵は、まだぶつぶつ言っている。

知らんがな、幸恵の周辺の世間の話は。

「大人として、良識を持って行動してくださいよ！」

ロマンス詐欺説が覆されてご不満の幸恵は、その日の業務中もずっと不機嫌だった。



家に帰って、私は、猫モドキに呆れられる。

「だから申したであろう？ 放つておけと」

この上から目線の偉そうなセリフは、猫モドキのセリフだ。
言葉が偉そなだけではない、文字通り上から。